



だから『女学院祭』は大切

女学院祭実行委員のみなさん、非常によく頑張ってくれていると頼もしく思っています。

今号は、私が本校に来て初めて、女子校の教育環境の意義について書いてみたいと思います。

女子校は、私たち教師も生徒も誰に遠慮することなく「女子」・「女性」の教育と発達に**関心やエネルギーを集中させることができる環境**ということです。だから、目の前にいる女子にふさわしい形で教育を進め、目の前にいる女性が最大限その能力を伸ばせるよう、そのことに集中して全力を尽くすことができると思います。

一方、共学制の学校だと歴史的に男子の教育のために構築された学問体系や指導法をそのまま女子も受けるようにしたものが一般的と言われる。昔から女性は男性によって作り出された学問や勉強の中に自らを合わせるようにしてきました。

ある研究者は、男性が構築した判断基準に照らして、女性が劣るように思われたり、能力を開発することをあまり期待されなかったりする傾向が、男女共にいる場では往々にしてあると言います。学校でも男子生徒に能力開発の機会や発言の場を譲ったり、自立すべき時に依存したりする傾向はいまだにあるようです。

私自身、男性であり、ずっと共学であったので、私は本校に赴任した時、本校の素晴らしさを発信するリーダーに当然なっていくなくてはならないと思い、何人かの先生に「女子校の良さを教えてください」と聞いたことがあります。どの先生も共通して言ったのが「女子校では全学的な行事から日々の小さな活動まで、女子がすべて取り仕切るので、共学の女子よりも表現力・企画力・組織力・リーダーシップ等を身に付ける機会が十分整っている」ということでした。確かにそういう現実、私も日々実感できます。だから今では私も堂々とそのことをPRの一つとして発信しています。

ジェンダー・バイアスのかからない自由で穏やかな雰囲気の中で、自分に素直な認識方法や興味関心が肯定的に捉えられ育成されていくことは、女性特有の能力だけでなく、男女が共有している能力も十分開花させ自己確立を促すのです。それが女子校の教育環境の好ましさだと考えます。

以前、女性問題というよりニューリーダーの話として、アメリカの女性判事の記事を読んだことがあります。その人はキリスト教系の女子大を出ていました。その人の長所として紹介されていた話の中に、判事として大変優秀であることと同時に、次のようなことが書かれていました。「彼女の信用は敵をつくらず、友人をつくることからきている」とか「判事には珍しいことだが、彼女は共に働いている人たちやその家族についてもいつも関心をもっている」とか「単に有罪の判決をするのではなく、正義へのコミットメントがある」とか……。これは女性の優れた特性であると。

脳科学研究では、女子が特性上男子より優れていたり、劣っていたりする領域があると言います。女子が優位な能力には、記憶学習、言語能力、地道な努力、感性の鋭さ、複数のことを同時にすすめる能力があると言われる。また、劣っている領域では、共学校より女子校の生徒が高位の成績を獲得したという研究結果もあると言います。

つまり女子校について考えるとき、まずは女子について知ることからが重要になると思います。脳科学の研究等も参考に、女子の特性を踏まえた教育を実践することは、女子校の存在意義につながると思います。今、「ジェンダーフリー＝共学化」という流れがあります。現実、女子校志願者は減少しています。私は、「ジェンダーフリー＝共学化」だとは思っていません。女性の特徴・特性・能力全体を開花させる上で、「女子」に焦点を当てて育て上げるための適切な環境づくりをこれからも目指していきます。

だから「女学院祭」は大切です。

(学校長 重枝 一郎)